

平成 29 年度「県内企業シゴト発見フェスタ」の事業効果の考察

1. 事業趣旨

1・2年生を主対象とし、職業選択において、知名度や待遇条件だけでなく、仕事軸で就職先を検討できるようにすることを目的とし、学生に対し、職業適性検査による客観的なデータを参考にしてもらいながら、県内有力企業の協力のもと「仕事」説明会を実施することにより多様な職種の存在を知り、職業選択の幅を広げる。

2. 実施日

平成 29 年 7 月 2 日（日） 10:00～14:30

3. 参加者

(1) 参加企業等 企業：40社

(2) 参加学生 254名 ※アンケート回収：200名

4. 参加学生の状況

図1は県内企業シゴト発見フェスタの参加者を大学別に、図2は学年別に示したものである。大分大学の研究科生を除いた総参加者は253名で、大分大学生が47.8%と最も多い。学年別に見ると、主対象者である1年生と2年生が全体の58.1%とインターンシップフェアに比べて13.5%多くなっている。また、3年生が41.9%で、次の項目以下でアンケート回収者の意識を詳しく見ることとするが、参加者の目的の達成度（学年によって異なると考えられる。）等により、今回のフェスタの有効性を見ることが重要であると考えられる。

図 1

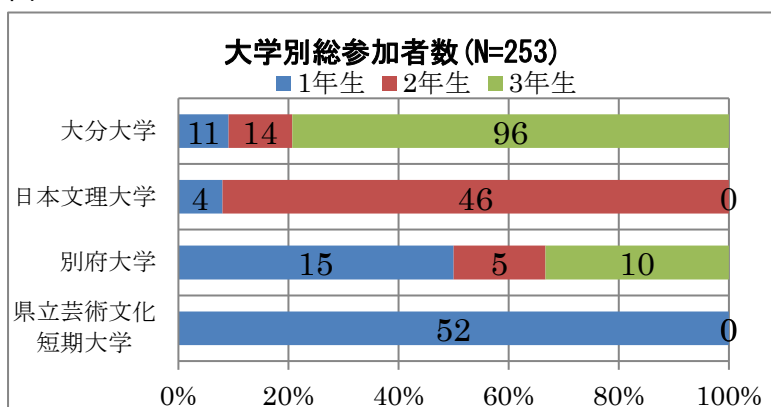
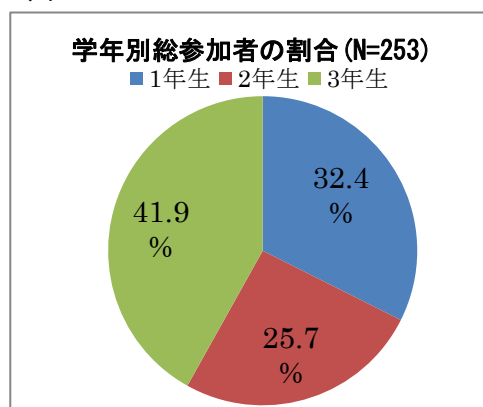


図 2



5. アンケートからの意識の考察

(1) 参加者の状況

図3は県内企業シゴト発見フェスタの参加者（総参加者254名中200名のアンケート回収）のアンケート回収したものを、大学別に学年別の人数の内訳を示したものである。参加者全体では大分大学が一番多く全体の41.0%となっており、この傾向は、同日開催した「インターンシップフェア」と同じである。しかし、同日開催であったために「インターンシップフェア」と同様で、大分大学では本事業の主

対象者である1年生・2年生が20.7%と少なく、3年生がほとんどである。別府大学も3年生が34.6%と多い。日本文理大学は2年生が91.5%、
 図3
 県立芸術文化短期大学は1年生が100%となっており、各大学での就職指導の違いがある可能性が見えてきた。

「職業適性検査による客観的なデータを基にして就職先を今後検討するために多様な職種の存在を知る」という事業趣旨から考えると、1年生・2年生の時期の参加が望まれる。

図3-②は昨年度の参加者（総参加者291名中198名のアンケート回収）を大学別に学年別の人数の内訳を示したものであり、今年度と同様に1年生と2年生を主対象に実施しており、傾向としてはほぼ同じであることがわかる。

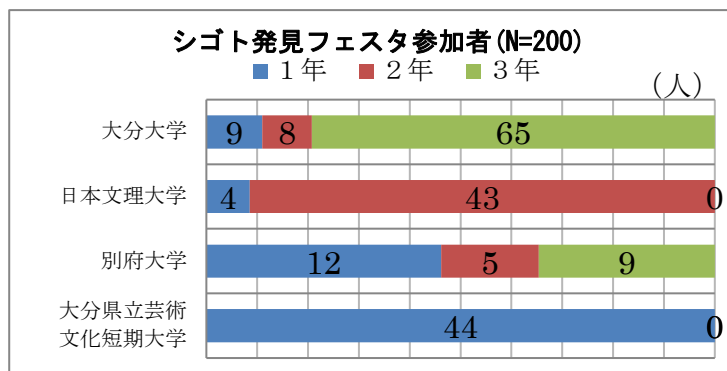
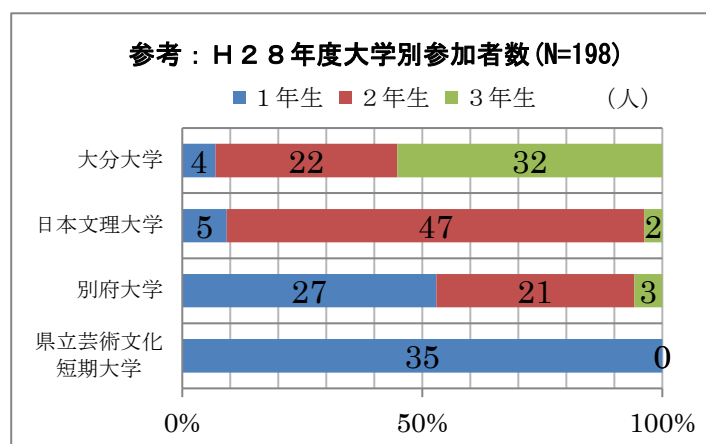


図3-②



(2) 職業選択への理解の状況

図4は大学別の就職選択のための理解の深まりについて人数を示したものである。全体では98.5%が「大変深まった」「やや深まった」と回答しており、非常に有効な取組であることがわかる。

3年生が多い大分大学では「大変深まった」が56.1%で最も多くなっていることから、3年生にも有効であることがわかるが、1年生や2年生の認識との違いを分析する必要がある。

図5は学年別に見たものである。図4で見たことと関連しており、学年毎の認識の内容の違いを分析する必要がある。

図4

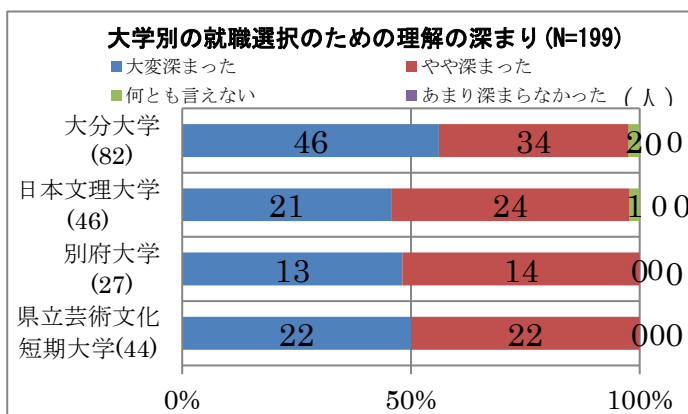
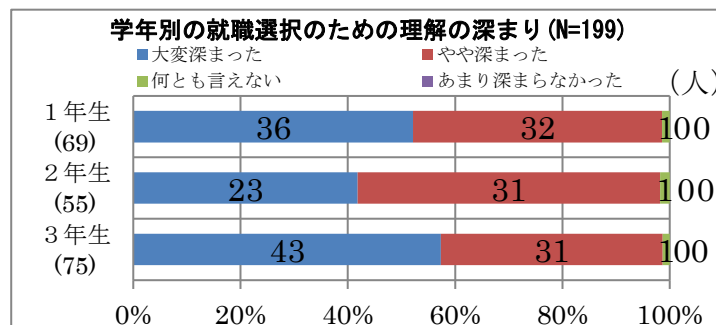


図5



(3) 新しい発見の状況

図6は大学別の職業や自己適正の新しい発見の有無について人数を示したものである。1年生が多い県立芸術文化短期大学と1年生と3年生が多い別府大学、3年生が多い大分大学が「新しい発見があった」の回答に比べて、ほとんどが2年生の日本文理大学の「新しい発見があった」の回答が他の大学に比べて若干少なくなっている。

図7は学年別の職業や自己適正の新しい発見の有無について人数を示したものである。「就職選択のための理解の深まり」に比べて新しい発見が「大変あった」の割合が若干少ないものの、学年別に見ると「就職選択のための理解の深まり」とほぼ同じ傾向で、2年生への効果が少ない傾向にあることがわかる。

図6

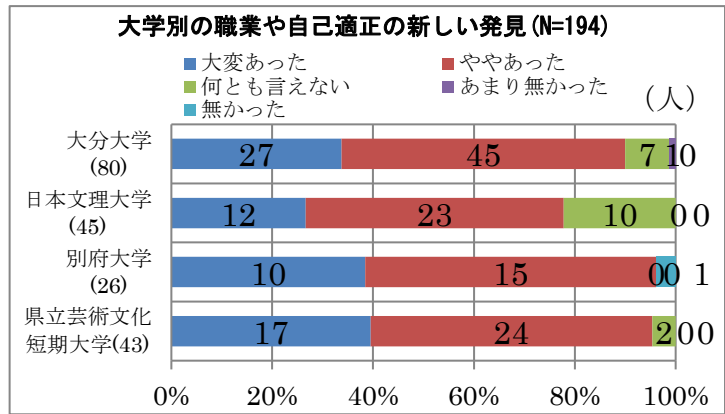
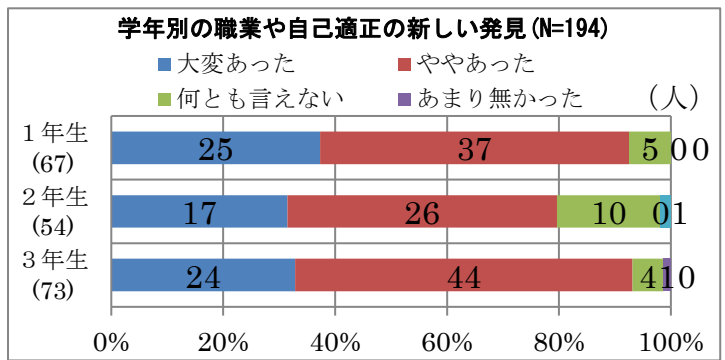


図7



(4) 就活への意識の変化の状況

図8

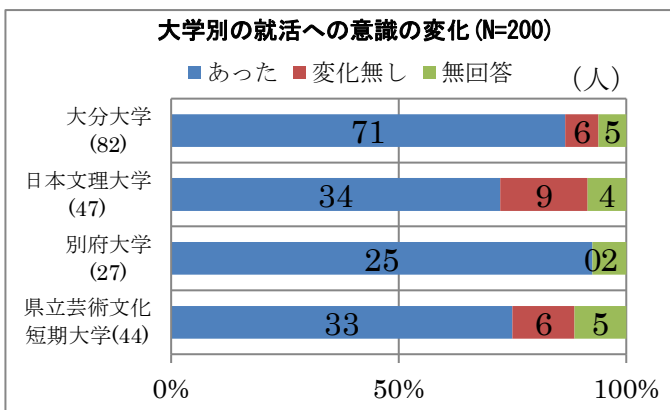


図9

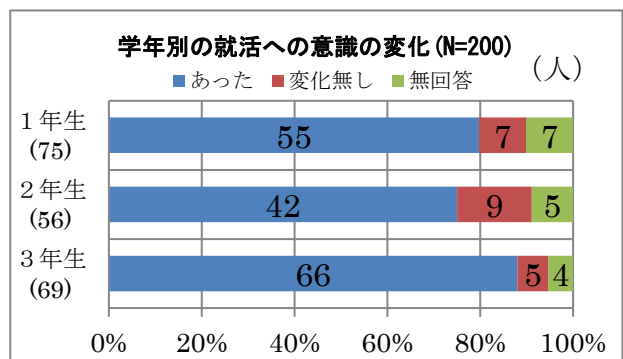


図8は大学別の就活への意識の変化について人数を示したものであり、図9は学年別の傾向を示したものである。

この2つの図からも、事業効果については図2から図5と同じ傾向が見られるが、3年生が多い大分大学と別府大学では「効果があった」が多く、図7からもわかるように3年生にとっての就活意識の変化に効果があるという傾向が見える。

6. 「職業を知る」観点からの学びについて

(1) 企業の業務に関する学び

- ・JR九州は鉄道だけでなく、様々な分野で活躍しているということがよく理解できた。
- ・Webデザインなどあまり知らなかった分野の知識が深まった。
- ・今まで考えていた仕事のイメージと少し変わった部分もあった。(例) 物流会社はドライバーがメインと思っていたが事務職もあることがわかった。
- ・銀行や税理士などの疑問点がいくつか解決できて良かった。
- ・警察は結構マイナスのイメージもあったが、実際にお話を聞いてみると、きつい中にも楽しさがあることを知れて良かった。
- ・システム開発がIT企業だけじゃないことがわかって良かった。
- ・自分が想像していた仕事内容と違っていたりしたのでより仕事について理解できた。
- ・アナウンサーの所では面接に役立つことなど、自分が知らなかったことも知れて勉強になった。
- ・税理士の仕事にコミュニケーション能力が必要であることがわかった。
- ・通関士の仕事がとても面白そうと思った。
- ・警察の実際の話や警察学校の話聞いて、きつそうだけど楽しそうだなと思った。

(2) 職業選択に関する意識

- ・営業も選択肢の中の1つになった。
- ・技術営業職について知ることができた。
- ・興味を持てる仕事に出会えた。
- ・デザイン関係の仕事に大きな魅力を感じる事ができた。
- ・県内の企業についてほとんど知らなかったのので、大分県内の企業を知ることができ、とても勉強になった。
- ・仕事の内容や企業イメージで選ばないほうがいいなと思った。
- ・自分には合わない業種だと思っていたけれど、実際に話を聞いてみたら面白そうだなと思うようになった。
- ・自分の考えていることがすべて正しい選択であるとは限らないと感じた。また、新しい選択肢が広がった。
- ・将来就きたいと思っている職種において、どのような知識を身につければ良いか知ることができた。
- ・自分の特技が活かせる職業がたくさん発見できた。
- ・就職に対する選択肢を絞ることができた。
- ・職業について持っていたイメージが実際は少し異なっていて新しい興味につながった。
- ・今まで持っていたイメージは偏ったもので、実際は全く違うということを知ることができた。
- ・専門職だけでなく違ったジャンルを受けることも必要だと感じた。

(3) 自己適正

- ・自分が企画立案に適合しているという新しい発見があった。
- ・意外に企画が好きかもしれないと思った。
- ・自分が知らなかった自己適性を知れて視野が広がった。
- ・適性テストに沿って話を聞いたら、これまで感じてなかったことが、案外自分に合っているかもしれ

ないとも思った。

- ・自分がやりたいこと、好きなことが「意見を出せる、データを分析する、作る」など設計に近いと分かった。
- ・自分は事務の仕事より、接客などの人と関わる仕事の方が合っていると感じた。
- ・農林水産業が自分に向いていると初めて感じた。

(4) 参加して良かったこと

- ・仕事の種類などをあまり知らなかったけど今回参加していろいろ知ることができた。
- ・仕事の概要だけでなくやりがいや大変なことなどかなり詳しく聞けたので良かった。
- ・工業系の職種でも理系の人だけでなく、就職してからもスキルを身につける勉強をしたりできるので文系でも大丈夫であることなどを聞けたので良かった。
- ・職業観について、社会人と自分の考えとのギャップがわかった。
- ・自分が今まで知ることのできない世界を知ることができたので良かった。
- ・いろんな職業の話を書く中でコミュニケーションスキルが大切だと知った。
- ・名前しか知らない企業の詳しい業務内容を知ることができた。
- ・自分ができることについて、自分自身が選択を狭めてしまっていた。
- ・大学での講義が、将来やりたいことにつながることを知った。

7. 「県内企業シゴト発見フェスタ」の効果の考察

4及び5で整理したことから、本事業の効果は非常に高いものであることがわかるが、「県内企業シゴト発見フェスタ」が就活へ導くための事業なのか、将来の就職を意識した大学での学びのあり方へ導くのか、それとも、両方なのかについて整理する必要がある。自由記述にあったように、1年生や2年生では「大学での講義が、将来やりたいことにつながることを知った。」という感想は、今後の大学での学びの意識付けに非常に有効であり、3年生では遅すぎると考えられる。3年生にとっては就活が目の前にあり、職業選択としての有効性が求められているのであろう。

<企業からの説明の様子>



5で分析したように、学生の学年別の参加の目的や効果の内容が見えないことから、参加した学生の学年と、6の「職業を知る」観点からの学びについて、「参加の動機」、各大学の就職指導の方向性等をクロスして分析することによって、就職支援事業としての内容を整理することが必要であろう。

<文責：大分大学COC+推進機構 特任教授 中川忠宣>